



人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## 「婚活あれこれ」

私は若い頃を中心に、537組もの結婚披露宴の司会をした経験を持っています。プロならいざ知らず素人にしては1年に20組ずつしても、26年余りもかかるのですから、これはもう驚異的な数字としか言いようがありません。何故そんなことができたのかと振り返って考えれば、当時わが田舎には中学や高校を出て、町内で働く勤労青年が沢山いて、活気に満ち溢れていました。それらの若者がこぞって参加する青年団活動は活発で、青年団は地域づくりは勿論のこと、男女が交流する格好の場所となっていたのです。また田舎には結婚を勧めるお節介な人も沢山いて、公民館が生活改善の一環として「1万円の会費で結婚式を挙げよう」なんて運動をしていたものですから、当時公民館に勤務していた私はその運動を推進するため、結婚式や披露宴の相談にも気軽に応じ、まるで便利屋の

ように結婚披露宴の司会まで頼まれてやっていたのです。

結婚披露宴はいわばブライダル産業で、披露宴につきものの料理屋、酒屋、花屋といった町内のお店が深く関わり、結婚シーズンの春と秋を中心に、おおよそ年間20組を越える披露宴が町内で行なわれていたのですから、披露宴がもたらす経済効果は大変なものでした。役場もそうした若者の新しい旅立ちをサポートするため、公民館の一室に結婚式場を設けたり、大ホールにドライアイスの霧が出る新秘密兵器まで用意し、また専任の担当者を置くなど、今では考えられないような熱の入れようで、町長さんや議員さんも大安の日の結婚披露宴の度にお義理出席して、齒の浮くような祝辞を述べていました。

流行語ではありませんがあれから40年、時代は移り過疎と高齢化、少子化に悩む私たちの町を含めた地方では、若者の姿は時々見ても青年団などといった若者組織は既になく、結婚式や披露宴の会場は都会に移って、披露宴会場の一つだった農協会館などは高齢化を先取りした葬儀場として生まれ変わり、華やいた旅立ちの雰囲気から、同じ旅立ちでもあの世への旅立ちに一転して、線香の匂いを立ち上らせているようです。

最近就活、終活などという「活」を冠

にした言葉をよく耳にするようになりました。勿論「婚活」もその一つです。ご存知と思いますがこの言葉が流行したきっかけは、今から8年ほど前の平成19年、晩婚化や未婚化の実態を取り上げた週刊誌「アエラ」の記事が話題となり、平成20年出版の山田昌弘・白河桃子共著「婚活時代」で流行語となり、その後も今日まで盛んに使われるようになりました。このことにいち早く目をつけたのは若者が得意とするインターネットサイトで、結婚願望の若者をデーターで取り込み、結婚相談所のような役割を担っているのです。これまで個人のことと静観していた行政も、減り続ける人口に危機感を募らせ、佐賀県伊万里市では「婚活応援課」までつくり、「婚活」ブームの火付け役となりました。商店街で出合いを楽しむ「まち婚」、ボランティア活動を共にしながら出合いを考える「ボラ婚」、ソーシャルネットワークを介して相手異性を紹介してもらう「ソーシャル婚」、親同士が積極的に結婚相手を探す「代理婚活」などなど、今では枚挙に暇がありませんが、自民党が「婚活議員連盟」までつくり、止まるところ知らない様相にも関わらず、2013年度の「少子化対策白書」によると、生涯未婚率は男性20・1%、女性10・6%となっており、その数字はどんどん高くなる傾向にあるようです。

海を見つめるカップル



さて「婚活」なんてなかった私たちが若い頃は、恋愛もありましたが、私のように少し真面目で控え目な青年は、見合いで結婚する人もかなり多かったようです。女性は「家付きカー付きババア抜き」の男性を理想とし、見た目の足の長い男前とホワイトカラーの仕事、それに次・三男と結ばれたい願望が強かったようですが、結局は落ち着く所に落ち着いて、幸せな人生を送っているようです。

私は今流行の「婚活」には多少違和感を持っていきます。本来見合いや恋愛から結婚に至るプロセスは人それぞれ千差万別なのに、それを他人の用意したパッケージに乗って、何のリスクもなく金さ

え出せば最小限度の労力で、相手に手に入れようとする手法には、首を傾げたくなるのです。今の婚活での出会いや結婚は、「男女がお互いを愛し合うこと」という、本来持つべきプロセスを抜いたり軽んじたりしているため、お互いが50点ずつ持ち寄って結婚し、100点の家庭を作っても、こんなはずではなかったと1点・2点と減点され、ついには破局離婚を招きかねないのです。私は見合いゆえ、お互いがお互いのことをよく知らないまま結婚しました。それでもこれまで、「男女がお互いを愛し合う」という根本を忘れることはありませんでした。思いうにお互いの持つべきものは0点に等しかったのですが、結婚の本来の目的であるお互いが満点の50点を目指し、新しい発見で1点2点と加点し、100点の家庭を目指して今もそれなりに幸せな家庭を築いています。

私はこれまで教育委員会で13年間青少年教育や生活改善運動を、産業課や地域振興課などで20年間余り地域づくりを担当し、行政マンとして若者の出会いを陰ながらサポートしてきましたが、私が「婚活」活動で重要視したのは①場と機会と情報の提供、②若者のコミュニケーション能力の向上、③自分を磨くのに必要な活動を活発にしなければなりません。面白半分は今流行

の合コンをして都会の格好いい女性を田舎に連れて来てご馳走でもてなしても、シビアナ女性たちはその場所を遊びの1環と捉え、食い逃げされるのが落ちなのです。②は「男女がお互いに愛し合うこと」への入口として自分の本当の気持ちを相手に伝えられるようなコミュニケーション能力を身につけさせることです。女性の前に立つと言葉も出ない真面目なだけ取り得の若者に魅力は感じません。結局行き着くところは③の自分が自分の内面に潜むもう一人の自分と自分の人生にどう向き合っているか、つまり人間力が必要なのです。今こうした若者に対する日常的なサポートを寄り添いながら、かつての私のような役割を果たしてくれる人は残念ながらいまいません。「婚活」のキーワードはひょっとしたらそんなキーマンかも知れません。

「何にでも 活つけたがる 現代人  
トンカツだって カツがついてる」  
「そういえば 昔流行った 歌がある  
#嫁に来ないか 僕の所へ」  
「若い頃 家付きカー付き ババア抜き  
40年が 経って幸せ？」  
「キーワード 私のような キーマンが  
いればNS 磁石のように」  
(若松進一笑売啞呵より)